



浄光寺の歴史



浄光寺住職 能美紹隆



慶念は豊臣秀吉の朝鮮出兵に従い戦争の悲惨を目撃し、帰国後のちがけの開教に従事し、石見一円に教線を張り現在のご法義繁盛の基礎を築きました。

慶念は三人兄弟

記録によると慶念は三人兄弟の一人で、一人は本願寺西国の古刹として有名な市木浄泉寺（朝枝姓）を、今一人は大朝圓立寺（能美姓）を継いでいます。第十三代誓応も浄泉寺より入寺していることから、浄泉寺を拠点にして次々と教線をのび

開基四百年
浄光寺はその淵源を尋ねると、真言宗「東の坊」に始まります。慶長十一年（一六〇六）開基住職「慶念」により浄土真宗に改宗し、本願寺第十二代准如上人の門に入りました。以後四百年が経過しています。



浄光寺発祥の地

し、現在の石洲門徒が形成されていった様子が伺えます。誓応は後に国府金蔵寺に入寺していません。

第十一代祥応の時代

浄光寺中興の師と仰がれる第十一代祥応の時、現在の九間四面の本堂が建立（一八三三年）されました。その折の記録に、七ヶ寺の末寺と十数名の役僧（弟子）の名が挙げられています。浄光寺を拠点にして教線を張り、石見の法田があたたく耕されていたことが伺えます。

生涯をお念仏一筋に生きた、浄光寺門徒の有福の善太郎さん（農家）や近くの跡市の小武善右衛さん（禅宗・村長を務め

る）のような妙好人が誕生したのも祥応の時代であります。

第十四代白英の時代

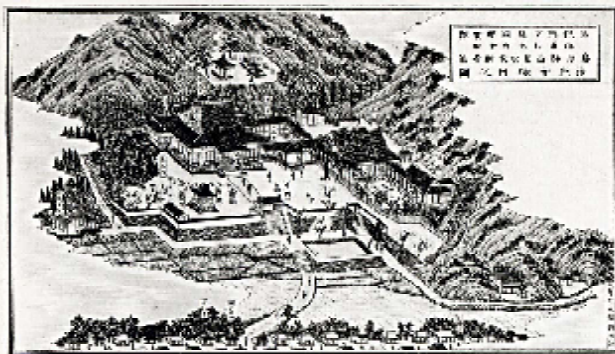
第十四代白英は、本願寺第二十一代明如法主より破邪顕正係を任せられ、明治に活躍した大洲鉄然・島地黙雷らと共に鹿児島、長崎をはじめ九州諸県を命がけて開教するなど、本願寺教団の発展に大きく寄与しています。浄光寺には大洲鉄然・島地黙雷の書簡や明如上人の御親筆が数多く残されていることからその親交が伺えます。また、白英は、浄光寺



都野津 浄光寺説教所

から四キロ離れた海辺の都野津の地に布教活動の拠点として浄光寺説教所建立を計画。多くの門信徒の労力奉仕によって完成を見たのは、白英没後の明治二十五年秋のことです。

歴代の住職はいのちがけで教田を耕し、お念仏に生きたお同行も又いのちをかけて法を護り伝えてきました。安閑としてはおれない思いがします。



150年前の浄光寺境内図